

教員養成課程におけるソルフェージュ指導に関する一考察 — アンケート調査を踏まえた授業改善への取り組み —

村田 睦美 荒木 善子
岐阜聖徳学園大学教育学部

A Study on Solfège Instruction in a Teacher Training Course: Efforts for Class Improvements Based on Questionnaire Surveys

Mutsumi MURATA, Yoshiko ARAKI

キーワード：ソルフェージュ リズム 読譜 教員養成 授業改善

I. はじめに

小学校、中学校等の音楽の授業において、教員にはソルフェージュの能力が求められる。それは教材となる音楽作品の楽譜を正確に読み取って演奏したり、児童、生徒の歌声や楽器の演奏における音程やリズム、表現の違いを聴き取ったりと様々な場面で楽譜を読み書きし、表現できる能力である。

従って、ソルフェージュは、教育職員免許法に定められた中学校、高等学校教諭一種免許状（音楽）の取得に必要な「教科に関する科目」として、教育学部の音楽専攻や音楽大学等では必修科目とされており、授業では、「聴音」、「新曲視唱」、「リズム練習」を中心に取り扱われていることが多い。

岐阜聖徳学園大学教育学部音楽専修でも、中学校、高等学校の教員免許取得を目指す学生を対象とし、1年次後期に「ソルフェージュ」が必修科目として開講されている。ソルフェージュの指導を充実させることは取り組むべき大きな課題であり、指導の改善を重ねてきた。その一環として、学校教育現場の教員へのアンケート調査を行い、ソルフェージュに対する意識や教育現場で必要とされる能力を明らかにしてきた。また、授業を受ける学生にもアンケート調査を行い、学生たちのソルフェージュにおける学習経験に関する情報を得た。

本稿では、この二つのアンケート調査の結果を踏まえた上で計画した内容で授業実践を行い、授業終了後に再度、学生に授業の振り返りを兼ねたアンケート調査を実施した。これらのアンケート調査や授業での実践をもとに授業内容の有効性や課題を明らかにし、今後のソルフェージュ指導の指針を得たい。

II. 授業の概要と授業改善に向けた取り組み

1. 授業の概要と指導の課題

(1) 授業の概要

本学では「ソルフェージュ」の授業では、読譜力、音楽力がつき、正確な音程で視唱、リズム視唱、視奏、及びリズム打ちをすることができるようになることを目指している。授業は、それぞれ声楽、鍵盤楽器を専門とする二人の教員が担当し、受講生は一クラス8～10人程度の二つのグループに分かれて授業を受ける。第2回から第8回までの前半と第9回から第15回までの後半で二人の教員が入れ替わり、クラス指導、グループ指導、個別指導、ペア活動等、必要に応じて様々な形態を取り入れて指導を行う。授業内容としては、前半、後半とも音程、リズムや拍子等、取り扱う音楽的要素は共通としつつ、担当教員の専門分野に応じたアプローチを行っている。

(2) ソルフェージュ指導の課題

ソルフェージュの指導については、これまでに様々な研究や教育実践が行われ、その成果が報告されているものの課題も多い。例えば、個々の能力の差への対応、短期間で成果を挙げる難しさである。新山真弓（1997, 1998, 2002）は、聴音演習を中心にした授業プログラムを作成し、理解度が異なる受講者を二つのグループに分け、時間差授業を実施する等、学生の理解度の差に配慮した授業実践を行い、理解度の差を縮めることは困難であったとしながらも学生に聴取能力の向上がみられたことを報告している¹⁾。

本学のソルフェージュ指導の課題は大きく二つである。第一は、クラス授業における学生の学習経験や能力の差とそれへの対応である。本来、ソルフェージュ能力の習得には、長期間に渡る訓練の積み重ねが必要である。そのような経験やレベルに差がある学生を対象として、大学での15回の限られた短い授業時間の中で、いかに教員として求められる能力を効率的に習得させ、力を伸ばしていけるかを追究することは授業の質の向上を目指す上での大きなポイントといえる。

課題の第二は、ソルフェージュを単体としての訓練にとどめず、今後、学生たちが指導していく教材や実際の音楽作品の読譜や演奏表現にどのようにつなげていけるかということである。ソルフェージュの訓練により、難易度の高いものを聴き取ったり書き取ったりするような技術を身につけられたとしても、それが音楽作品を実際に演奏する上で活かされていないことがしばしば見受けられる。ソルフェージュの授業の中ではリズムや音程等を意識できているものの、実際の演奏になると、発声や指を動かすこと等、目の前の技術的な問題だけに意識が集中してしまう傾向があるように思われる。

今後の指導実践や音楽活動につながる力を身につけられるようにするためには、従来、行われてきたソルフェージュ能力をいかに高めるかという訓練的な内容に加え、ソルフェージュの学習を学生たちが実際に指導していく教材の読譜や演奏表現へとどのようにつなげていくかという視点での指導方法の検討が必要であると考えられる。

これらを踏まえて学生の技能の向上や効率的な指導を行うために、これまで様々な授業改善を試みてきた。次節では、令和2年度の取り組みについて述べていきたい。

2. 授業改善に向けた取り組み—教員、学生への二つのアンケート調査より—

授業内容を検討していく上で、授業を受ける学生の実態や学校教育現場でどのようなソルフェージュ能力が求められているかを把握しておくことが欠かせない。そこで、令和2年度の授業改善に向けた取り組みとして、学生、及び学校教育現場の教員を対象とした二つのアンケート調査を実施した。

(1) 学生におけるアンケート調査

令和2年度「ソルフェージュ」の履修者19名を対象として、アンケート調査を授業の初回と最終授業終了後の計2回実施した。ここでは、まず初回の授業に実施した第1回目の調査についてみていく。この調査では、学生のソルフェージュにおける学習経験の実態の情報を得ることを目的とし、令和2年9月21日から1週間の回答期限を設定して行った。学修支援システムMANALOGを用いて、選択式、記述式の両方を含む質問を行い、回答率は100%であった。調査で設定した質問は、これまでのソルフェージュに関する学習経験について、音楽分野における興味や得手不得手について、教員に必要なソルフェージュ能力についての大きく3種類、計16の質問である。

ここでは、調査の回答結果を学生の実態に絞って簡潔にまとめておく。授業を受ける学生19名のうち47%（9名）がソルフェージュの学習経験がないと回答した。経験があると回答した学生の中でも、視唱、聴音、視奏、音楽理論の各項目をすべて学習してきたわけではなく、受験に必要であったという理由から、限られた項目だけの学習や短期間の経験である者も多かった。

また、音楽分野における興味や得手不得手に関しては、歌うこと、楽器を演奏することが得意、好きであると回答した学生が多数を占めた。その一方で、音楽分野における苦手なこととして、音楽理論と回答した学生、聴音や初見視奏等ソルフェージュに関わる内容を挙げた学生が共に32%（6名）いた。音楽理論では、覚えることが苦手で調判定や移調が難しいと回答する学生が目立った。

このアンケート調査において、ソルフェージュの学習経験がないことに不安を持っている学生が多く、学習経験のある学生でも、実技演奏よりも音楽理論やソルフェージュの方に苦手意識を感じていることが明らかになった。

(2) 学校教育現場の教員におけるアンケート調査

学生への調査に加え、学校教育現場の教員に対する調査を実施した。令和2年8月18日、令和3年8月12、18日に実施された3回の教員免許状更新講習を受講された教員の中で、中学校、高等学校教諭一種免許状（音楽）を所有する37名を対象者として、ソルフェージュに関するアンケート調査への協力を求め、同意を得た。この教員への調査では、教員のソルフェージュにおける意識と教育現場で必要な能力の情報を得ることを目的とし、調査紙を用いて選択式、記述式の両方を含む質問を行った。回

答率は100%であった。質問事項は表1の通りである。

表1 教員への聞き取り調査の質問事項

<p>Q 1 小・中学校の音楽指導においてソルフェージュ能力は必要か。</p> <p>Q 2 Q 1で「はい」と答えられた方は具体的に必要だと思われる項目を以下の中からいくつでも選択してください。1. 音程感 2. リズム感 3. 拍節感 4. 和声感 5. 読譜力 6. 初見能力(視唱) 7. 初見能力(視奏) 8. 聴音 9. 弾き歌い 10. 伴奏付け 11. コードネーム奏 12. 即興演奏 13. 移調 14. 移動ド唱 15. 歌唱演奏技術 16. 鍵盤演奏技術</p> <p>Q 3 上記で選択された項目で特に重要だと思われる項目の番号を一つ挙げてください。</p> <p>Q 4 教員養成課程で学ぶ学生に、音楽指導においてどのようなことを身につけておいてほしいか。</p> <p>Q 5 指導されているソルフェージュについての考えを自由に書いてください。</p>

回答結果は、Q 1については、音楽指導においてソルフェージュ能力は必要ないと回答した教員は37名中1名のみであった。97%の教員が歌や楽器で音楽を演奏したり、指導したりする上での基本としてソルフェージュを捉えており、教員にとってソルフェージュ能力は必要であると回答した。

Q 2の音楽指導に必要なソルフェージュの具体的な能力としては、音程と回答した教員が最も多く、97% (36名)の教員から選択され、次にリズム感92% (34名)、拍節感81% (30名)、読譜力76% (28名)、歌唱演奏技術65% (24名)と続いた。

Q 3の特に重要だと思われる能力については、読譜力を挙げた教員が27% (10名)、次にリズム感が16% (6名)、音程が14% (5名)、拍節感が11% (4名)という結果で、Q 2とは順位の入れ替わりがあったものの、いずれにしても教員として必要な能力の上位に、音程、リズム、拍節感、読譜力が挙げられていることがわかる。ここで興味深いことは、学生に行った同じ質問の回答では、音程、リズムは教員と同じように選択されていたが、読譜力と回答した学生は一人もいなかった点である。教員の聞き取り調査のQ 5の自由記述の中でも、音楽を聴かせる時に楽譜を見ながら聴かせている、音や旋律の動きがわかるように楽譜の読み書きを指導している等、読譜に関する記述が数多くみられたことから、学生と教員との「楽譜」に対する意識の違いが感じられた。

Q 4の音楽指導において学生に身につけておいてほしいこととして、上記に挙げられた読譜力に加えて、児童、生徒の前で自信をもって歌って示す、伴奏する等、直接見せたり、聴かせたりできるような歌や楽器の演奏技術、音楽を児童、生徒に容易な言葉でわかりやすく伝えることができる能力、音楽の幅広い知識と理解、等の回答がみられた。

Ⅲ. 実践内容と学生の調査内容と結果

ここでは、二つのアンケート調査の結果をもとにして組み立てた実践内容を示す。令和2年度以前は、リズム打ちや新曲視唱のテキスト²⁾を中心に使用して授業を行っていたが、令和2年度からは、教科書で取り扱われている教材を中心に用いて授業を行うこととした。また、新型コロナウイルス感染拡大防止対策における飛沫感染防止という観点から、視唱よりも特にリズムに重点を置いて授業を進めるように配慮した。ここでは、紙幅の都合により、第2回から第7回までの前半クラスの授業に絞って、実践内容の一部を紹介する。

1. 実践内容—第2～7回前半クラス—

新音楽辞典には「リズムは音楽におけるもっとも大きな特性であって、その教育は歌や器楽ばかりでなく、音楽教育の全般にわたって強調されなければならない。」³⁾とある。「リズム」を本授業の課題の中核として実践を行った。毎時【リズム・理論】【楽譜・記譜】【視奏】の各項目に照らし合わせながら指導内容を提示・実践し、授業後MANALOG 掲示板上で確認した。図2・3・4・5・6に書かれている楽譜は全て授業時の学生ノートから抽出した。以下に第2～7回前半クラスの内容を述べる。

第2回 りずむあみだくじ

授業開始時、「中学生の音楽1, 2・3上, 2・3下」⁴⁾に掲載されている『リズムゲーム』を提示し、筆者が考案した『りずむあみだくじ』(図1)を配布した。第7回までに、中学校学習指導要領音楽の『教科の目標』に沿った目的(評価内容)を明らかにした『中学校の音楽授業内での課題としてのリズムゲーム』を各々発表できるよう考察・作成することを指示した。

実践方法は以下の通りである。①自分の脈拍を測り、自身の身体の中のリズムを知る。【リズム・理論】②メトロノームにあわせて $\text{♩} = 60$ で四分音符を打つ。その後その四分音符の二等分割・三等分割・四等分割を正確に打つ。それらが混在したリズム打ちもする。【視奏】③配布されたプリント『りずむあみだくじ』に指示された条件で音符を書き込む。縦線の部分に『あみだくじ』の横線も書き込む。【楽譜・記譜】④自分の作った『りずむあみだくじ』でリズムを打つ（条件：四分音符を1拍とする。以降リズムを打つ場合は全てこの条件を用いる）。【視奏】⑤ペアで、互いに作った『りずむあみだくじ』を用いて交流する。【視奏】⑥自分で作った『りずむあみだくじ』の中で一番好きなリズムを『リズム譜』として書き起こす。ただし拍子記号はまだ書き込まない。【楽譜・記譜】⑦三人一組でグループ（A・B・C）を組み、グループ内で各々のリズム譜を用いて全員で交流する。その中の一つを『ベストオブリズム賞』として選出する。【視奏】⑧『ベストオブリズム賞』に選出されたリズム譜をA・B・Cの代表が板書する。その板書されたリズム譜を書かれた順に一つの楽譜として各自配布された五線紙に二組書き写す。【楽譜・記譜】⑨単純拍子について理論上の確認をする。【リズム・理論】⑩⑧で板書されたA・B・Cのリズムに小節線を入れ4分の2拍子（図2a）4分の3拍子（図2b）のリズム譜として完成させる。【楽譜・記譜】⑪⑩のリズムを、拍子感をもって打つ。最初はリズムのみを手拍子する。その後右手で2拍子の指揮を振りながら左手でリズムを打つ。同様に3拍子で行う。【視奏】

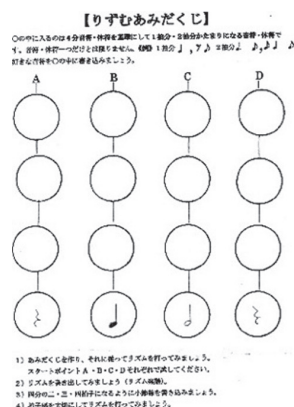


図1 りずむあみだくじ

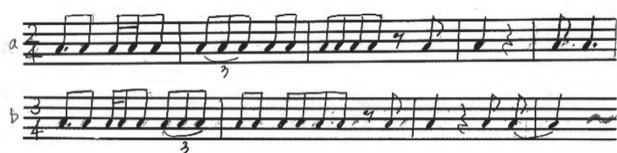


図2 第2回授業時の学生ノート



図3 第3回授業時の学生ノート

第3回 メッセージ／ハ長調・4分の4拍子（単純拍子）・アウフタクト（弱起）／星梨津子作詞 佐井孝彰作曲（中学生の音楽2・3上P.22・23教育芸術社、以下、教科書名、出版社の表記を省略）

主旋律（歌のパート・単旋律）の第1小節目から第8小節目までを課題（以下Aと記述）とする。単旋律におけるリズム・旋律・構成の音楽を形づくっている三つの要素や要素同士の関連を知覚し、それらを表現するための技能を高めることを目的として実践を行った。

①アウフタクトを確認後、楽譜からAの旋律のリズムのみを黙読する。【リズム・理論】②Aをリズム打ちする。【視奏】③Aのリズムを楽譜に書き起こす。（図3a）【楽譜・記譜】④楽曲が4分の4拍子で構成されていることを確認する。【リズム・理論】⑤拍子感を持ってAのリズムを打つ。まず、③のみを各人が打つ。その後四分音符で拍子感をもって4分の4拍子を打つチームと③を打つチームに分かれ合奏する。それを交互に行う。次にチームに分かれて拍子・リズム感を大切に、右手で③で記譜したリズム、左手で四分音符を各人が打つ。4分の4拍子の基に正確なリズム打ちができる。【視奏】⑥①から⑤で得た知識と技能をもとに、正確にAを弾いて歌えるようペアで練習する。ピアノでの音取りと歌唱を交互に行う。最後に発表する。注意すべき練習ポイントとしてアウフタクト・音符と休符の長さのあつかいを指示する。【視奏】⑦Aを写譜する。その後、楽譜を閉じて記憶しているAを五線譜に書き起こす。（図3b）【楽譜・記譜】

第4回 時の旅人／ハ長調・4分の4拍子／深田じゅんこ作詞 橋本祥路作曲（2・3上P.73）

歌のソプラノ・アルトパート（複旋律）の第25小節目から第29小節目までを課題（以下Bと記述）とする。目的は第3回と同様である。第2回で行った①のリズム黙読は事前学修とした。

①Bのリズムのみを楽譜に書き起こす。五線の第2間にソプラノパート、第1間にアルトパートを譜面上のバランスに気をつけながら記譜する。（図4a）【楽譜・記譜】②Bのソプラノパートのリズムを全員でリズム打ちする。⑦ソプラノパートのみ⑧右手：ソプラノパート・左手：四分音符⑨右手：ソプラノパート・左手：4分の4拍子の拍子感を持っての四分音符、の順に行う。パートの重なりを確認

しながら正確に合奏する。【視奏】③アルトパートのみ同様に全員でリズム打ちする。【視奏】④三人一組のグループになり、一人1パート（ソプラノ・アルト・カウントのパート）を担当しリズム合奏する。どのパートもできるようにする。練習していく中で、メンバー内で各パートの《プロ》を決め合奏練習しその後発表する。【視奏】⑤①から④で得た技能をもとに、正確なリズムと音程（音名唱）で合唱でできるように同じグループで練習する。ソプラノパート・アルトパートの各音名唱と4分の4拍子のカウントを交代で行う。最後に3回に分け、グループ発表として各人が全てのパートを演奏・カウントする。注意すべき練習ポイントは、カウントに合わせての合唱、縦の音の重なり、音符と休符の長さのあつかいとする。【視奏】⑥記憶しているBを五線譜に書き起こす。（図4b）【楽譜・記譜】



図4 第4回授業時の学生ノート

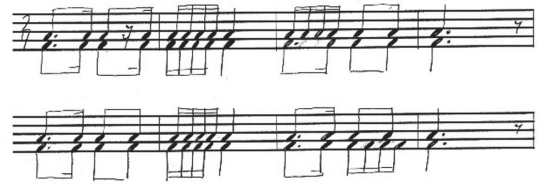


図5 第5回授業時の学生ノート

第5回 花／ト長調・4分の2拍子（単純拍子）／武島羽衣作詞 滝廉太郎作曲（2・3下P.7）

歌の上声部・下声部（複旋律）の第45小節目から第60小節目までを課題（以下Cと記述）とする。目的は第4回と同様である。

①Cのリズムのみを楽譜に書き起こす。五線の第2間に上声部、第1間に下声部を譜面上のバランスに気を付けながら記譜する。休符の書き方に気をつける。（図5）【楽譜・記譜】②①を上声部・下声部に分かれリズム合奏する。【視奏】③Cの上声部と下声部で奏でる和音の「音の隔たり（音程・度数）」を楽譜に書き込む。【リズム・楽典】④Cの上声部・下声部の担当を決める。正確なリズムと音程（音名唱）に加え、上声部・下声部の音の隔たりを楽典的に理解しながら2音が共鳴するように工夫してペア学習する。その成果を発表する。2音が共鳴するためには、「正確な音程・リズム」に加え「楽典（音楽の知識）」「ペアとしてのリズム感」「声楽技能」の必要性を理解する。【視奏】

第6回 サンタルチア／変ロ長調・8分の3拍子（単純拍子）／ナポリ民謡（2・3上P.24）

歌の第9小節目から最後まで旋律（単旋律）をDとする。目的は第4回と同様である。

①楽譜のD部分に2音間の音程（度数）を書き込む。二人一組2グループ・三人一組1グループに分かれ書き込まれた音程を確認する。【リズム・楽典】②リズム譜は書き起こさない。旋律を見て、右手でDのリズムを打ちつつ左手で8分の3拍子の指揮を振る。【視奏】③Dで使われている2度・3度・4度・6度音程の音取りをペアで練習する。一人がピアノの音を弾きながら「○○度上の音」と指示を出し、もう片方が指示された音程を考え音名唱する。音の隔たりを楽典的に理解しながら正確な音程（音名唱）ができるように工夫してペア学習する。【視奏】④Dを正確な音程で歌えるように工夫してペア学習する。その成果を発表する。【視奏】

第7回 リズムゲーム

学生一人一人が考案・作成した「リズムゲーム」を二つのグループに分かれて行った。ゲームを行いながら「感想・講評（具体的に説明・理由を加えながら批評）・評価・本日の感想」をワークシートに記述させた。学生A・Bの作成したゲームを記しておく。（図6、図7）

学生A「音符と休符を反対に！反対のリズムはなんだろなかるた」ルール「4分の4拍子、1小節」のお手本のリズムを聴き、そのリズムで使われている音符と休符を反対にしたカードを選ぶ簡単なゲームである。このゲームのなかでは、音符の反対は休符、休符の反対は音符ということにする。（四分音符⇔四分休符、八分休符⇔八分音符）第3問の解答は⑰、第14問の解答は⑬（図6）〈例〉たくさん手札をゲットできた人が勝ちとする。評価は、(1)の知識・技能に関わらせるイメージで、リズムかるたは、様々な音符と休符の長さをきちんと把握した上で応用する力を持っていることが楽しむことにつながる。ゲームを楽しみながら、知識が身についているかの確認をできるようにする。

学生B「リズム神経衰弱」ルール（図7）のカードを用意し、音符の描かれている面を裏にして並べる。じゃんけんで勝った人から好きな2枚をめくる。違うリズムのカードなら裏向きに戻す。同じリズムのカードならそのリズムを手で打つ。打てたらそのカードを貰って、さらに2枚をめくる。打てなかったら裏向きに戻す。カードが無くなるまで続け、最後に手元にあるカードが多い人が勝ち。手元にあるカードを自由に並べて、オリジナルのリズム譜を作ってみる。評価は、音楽の目標である「音楽活動の楽しさを体験することを通して音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う」につなげる。

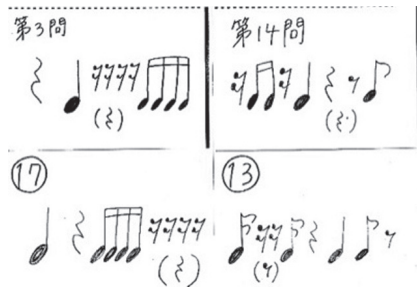


図6 学生A考案・作成「リズムゲーム」



図7 学生B考案・作成「リズムゲーム」

2. 学生への第2回目のアンケート調査内容

ここでは、授業の最終回に学生を対象として実施した第2回目のアンケート調査についてみていきたい。この聞き取り調査は、「学生の学習状況」、「授業実践による成果」について学生の視点から知るところを目的とし、最終授業日の令和3年1月19日から1週間の回答期限を設定して行った。初回と同様に学修支援システム MANALOG を用いて、選択式、記述式の両方を含む質問を行い、回答率は81%であった。質問事項は表2の通りである。

表2 学生への第2回聞き取り調査の質問事項

- | |
|---|
| <p>Q 1 確認試験に向けての自主練習、復習予習等、取り組み状況を教えてください。</p> <p>Q 2 確認試験で自分が取り組んだ内容を書いてください。</p> <p>Q 3 確認試験を終えて、これまでの取り組みの成果を感じましたか。</p> <p>Q 4 確認試験を終えて、授業を通してできるようになったこと、成果を書いてください。</p> <p>Q 5 確認試験を終えて、授業を通して明らかになった自分の課題や反省点を書いてください。</p> <p>Q 6 自分のソルフェージュのこれまでの取り組みを振り返り、自己評価しましょう。</p> <p>Q 7 Q 6 で回答した自己評価について、その評価をつけた理由を具体的に書いてください。</p> <p>Q 8 授業を終えての感想、気づいたこと等、自由に書いてください。</p> |
|---|

3. 学生への第2回アンケート調査結果

授業終了時の第2回目のアンケート調査をもとに、「ソルフェージュ」の授業の学習を通して、学生のソルフェージュへの意識や技能にどのくらい変化があったのかをみていく。ここで取り上げる調査結果には、本稿の実践内容として紹介していない後半クラスのアンケート調査も含んでいる。

学生のソルフェージュの取り組みについて、Q 1 の事前事後学修や自主練習等の取り組み状況の回答結果は、17名中、毎日取り組んだ18%（3名）、週に4～6日59%（10名）、週に1～3日23%（4名）、何も取り組まなかったが0%であった。「毎日取り組んだ」と「週に4～6日」を合わせると77%の学生が、授業時間以外でも週4日以上、自主的かつ積極的に取り組んでいたことがわかる。

授業に対する学生の反応について、Q 3 の授業での取り組みの成果を感じたかという質問に対しての回答は、成果を感じた53%（9名）、やや感じた41%（7名）、あまり感じなかった6%（1名）、全く感じなかったと成果があったかどうかわからないが共に0%であった。

Q 4 の授業を通してできるようになった具体的な成果としては、学生に教員として習得してほしい力として取り扱った内容が挙げられており、回答の詳細をまとめると以下の通りである。

- ① 記譜：リズム譜をバランスに気をつけながら書けた。写譜を丁寧に正確にできるようになった。
- ② 演奏：音程を意識しながら正確に歌えた。休符の感じ方や取り方に気をつけて演奏できた。
- ③ 伴奏：コードネームを読んで自分で伴奏を作れるようになった。指揮をしながら伴奏できた。

- ④ 複数のことを同時に行う：拍を数えながらリズムを打てるようになった。左手で拍、右手で旋律のリズムを打つことができた。

その一方で、Q 5の授業を通して明らかになった課題や反省点については、弾き歌い、同時に拍と旋律をリズム打ちする、指揮をしながら弾く、歌う等、同時に二つ以上の動作を行う課題に、慣れずに混乱してしまうこと、課題ができるようになるまでに時間がかかること、音符の長さや音の高さ等、頭では理解できるが正しく記譜する力が足りない、拍感や拍子の違いは理解できたが、それを歌で表現することができない等の回答があり、授業の成果と類似した内容の記述もみられた。

Q 6の学生自身の自己評価については、5段階評価で17名中、秀(90点以上)12%(2名)、優(80点台)59%(10名)、良(70点台)29%(5名)、可(60点台)と不可(50点以下)は0%の回答であった。秀と優を合わせて71%の学生が、自分の取り組みに対して成長や変化がみられた、あるいは努力したと高い評価をつけている。Q 7の評価をつけた理由の記述内容は、次の大きく三つに整理される。

- ① 上達した実感：慣れないことでも練習の積み重ねによって、成果が感じられた。
- ② 意識の変化：音程やリズム等に対する気づきがあり、意識が変わった。
- ③ 鍵盤楽器や声楽の演奏への応用：授業で理解したことや身につけたことを演奏に活かした。

Q 8の授業の感想等の自由記述では、肯定的な意見が数多くみられた。記述は授業方法や内容に関する事、達成感に関する事の大きく二つに整理される。以下、学生の記述例を原文のまま記す。

① 授業方法や内容に関する記述

- ・ペアやグループでの活動が多くあったことで、自分のできていないところを見つけてもらえたり、お互いに助け合いながら高め合っていたりすることができたことがとても良かった。
- ・手でリズムを叩いたり、ピアノの伴奏をするなど、実践的な授業でとても楽しかったです。
- ・3つの分野にわけて授業の中でどこを今学んでいるのかも合わせて指導して下さったため、振り返りがしやすく、何が重要であるのかもわかりやすかった。
- ・授業の最後に毎回発表の場が設けられていたことで、自分の自信に繋がったり、緊張に慣れたりしていくことができた。
- ・教員になったとき、実践できそうなもので、一つの案から発展と活用できることを知った。
- ・リズムゲームの発表では、9人それぞれが違うゲームで自分では絶対に思いつかなかっただろうゲームもたくさんあり、教員になった時実践できそうなものばかりでみんなで共有できてよかった。ゲーム中でも一つ案を出すとそれに対応して次から次へと発展させ活用できることが分かった。

② 達成感に関する記述

- ・コードを使った伴奏や、その他未経験だったことをだんだんとできるようになっていきました。普段することのない沢山の経験をして、音楽の幅が広がった気がします。
 - ・練習を重ねると、だんだんと頭が慣れてきて、いつの間にかスラスラできるようになることが、とても不思議でした。積み重ねの成果は本当に大きいものなのだと気づくことができました。
- 次章では、上記のアンケート調査結果をもとに、授業の有効性について考察を進めていきたい。

IV. 考察・分析—授業方法や内容の有効性と課題—

授業実践の内容による成果と課題を述べ、指導の有効性と課題を明らかにしたい。成果は大きく三つに整理できる。第一は、ソルフェージュの学習は本来なら特に聴音、新曲視唱等、短期間で成果を得ることが難しいものであるが、自分で繰り返し練習することができる課題を取り入れたことで、学生が一定の成果を感じられる結果となったことである。第1回目の学生のアンケート調査や教員のアンケート調査をもとに、一般的なソルフェージュ学習の多くの時間を占める聴音については、リズムを正確に記譜できるようにする範囲にとどめ、聴音でリズムを聴き取らせるよりも、いかにリズムを意識して演奏するかということに重点を置いて指導した。また、視唱については、新曲を課題にするよりも、教科書における教材の旋律の中で音程を意識させることにした。「音程やリズム等に対する気づきがあり、意識が変わった」という学生の記述があったように、歌ったことがあり、知っている曲でも、音程、あるいはリズム等、ある一つの視点に注目して曲をみていくことで、常日頃の感覚や意識がいかに曖昧になっているかという気づきにつながったのではないかといえる。また、取り扱う課題を教科書の教材にしたことにより、教員として指導できなければいけない内容とより深く結びついて、学生たちに受け入れら

れたのではないかと考える。

第二は、学習経験に差異がある学生が混在していることがソルフェージュ指導における大きな課題の一つであったが、授業の中でペア活動やグループ活動の時間を多く取り入れたことで、互いに教え合い、支え合うことができ、学生が楽しみながら授業を受けることができていたことである。

第三は、ソルフェージュの授業で理解し、身につけた内容を鍵盤楽器や声楽の演奏に活かしたという学生がいたことである。楽譜にはたくさんの情報があることを知ったという学生の記述もあったことから、今後、このような楽譜に対する意識の変化が、演奏の際の表現を考える上で活かされていくことが期待される。

このように実践した授業方法や内容の有効性が明らかになった一方で、様々な課題もみえてきた。課題の一つは、上記のように鍵盤楽器や声楽の演奏に活かせたと回答した学生がいる反面で、「拍の感覚や違いを感じることはできたもののそれを歌で表現することができなかった」と記述した学生もみられたことである。その要因の一つとして、理論上では理解できていても、理解したことを演奏で表現できない歌唱や楽器の演奏技能の不十分さも考えられるが、本来は、演奏に至るより先にまず楽譜の中の音楽的な要素を読み取り、その上で、それらをいかに表現していくかというプロセスで練習が進められていくべきである。そうしたことから、ソルフェージュの授業が独立したものとならず、演奏表現を指導する声楽や鍵盤楽器等の授業と相互に作用し合い、連携を図りながら展開されていく必要があるのではないかと考えている。

V. まとめと課題

本研究では、令和2年度に行ったソルフェージュの授業方法や内容についての有効性と課題について、学生による聞き取り調査の分析結果や記述をもとに分析、考察を進めてきた。その中で、ソルフェージュの学習を実際の演奏表現へ確実につなげていけるような内容のさらなる検討が必要であることが明らかになった。

なお、教員のアンケート調査の自由記述において、音楽の指導では児童、生徒に歌って示すことができるように歌唱技術が大切であるという記述が数多くみられたが、本研究では、新型コロナウイルス感染拡大防止への配慮もあり、歌唱についての内容の検討には深く踏み込めていない。今後の課題として、学生がソルフェージュの能力として習得したものを自分自身の演奏につなげるだけの指導にとどまらず、音楽を指導する上で、いかにわかりやすく児童、生徒に伝えられるようにするかということにも目を向けて、継続して追究していきたい。

注・文献

- 1) 新山眞弓 (1997): 初等教員養成課程における授業科目ソルフェージュの教育内容編成について (1), 兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター『実技教育研究』第11号, 11-22.
新山眞弓 (1998): 初等教員養成課程における授業科目ソルフェージュの教育内容編成について (2), 兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター『実技教育研究』第12号, 21-30.
新山眞弓 (2002): 初等教員養成課程における授業科目「ソルフェージュ」のプログラム作成とその検討—兵庫教育大学1年生の授業実践をとおして—, 兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター『実技教育研究』第16号, 53-60.
- 2) 赤石敏夫他 (2008): 「視唱 ステップアップ 初心者から音大生まで」, 全音楽譜出版社, 東京.
- 3) 池内友次郎他 (1977): 新音楽辞典 楽語, 音楽之友社, 東京, 595.
- 4) 小原光一他 (2016): 「中学生の音楽 1, 2・3 上, 2・3 下」, 教育芸術社, 東京.